

富士を指さす

「おうい！」

誰かが呼ぶような気がする、ふりかえってみたが人影らしいものはみえない。道があると言え
ばあるが、無いと言えは無いとも言える。夏草が茂るに任かせた武蔵野の原である。

広大な武蔵野を渡りゆく自分の小さな姿が、はつきり脳裡にえがき出されて、なにか心もとな
い、それが、人が呼ぶように思わせるから耳なのかも知れない。

足音に驚いて膝にとびつく虫にさえ、なにか話しかけたいような気がしていたのだ。

「待った、待った」

がさがさと夏草を押し分けて、一、二、三間先きの道端に飛び出したものがある。

蓮長法師は「おう」と思わず脚をとめた。

「脚の早いお方ぢやなあ、わしは今朝からあんたを追いかけていたのじゃ。房州へ帰る若い法師
が、今さつき出掛けたと今朝の宿場できいたものぢやから、御同業のよしみで道づれになろう

と、跡を追いかけていたんぢやが、やっと近道をして今追いついた」

言いながら汗をふきふき道につつ立つたのは、六十年輩の僧侶であった。

「さようでしたか、私も誰方か呼ぶように思いましたが人影もみえず、人恋しさのから耳かど、自分をあざけりながら歩いておりました」

「今朝から呼びつづけで喉が痛いわ、さあさあ先きを急ぐ、話は歩きながらでもできる。ともに参ろう」

呼びとめておいて、自分が先きに立つて歩き出した。

「……時にあなたは鎌倉におられたか」

「はい」

蓮長法師は静かに答えた。

「どの位いおられた」

「はい、ちょうど四か年程おりました」

「では光明寺殿の御法話を聴聞せられたかなあ」

「さよう、度々拝聴しました」

「それは結構なことじゃ、わしは有難とうて有難とうて……わしもなあ房州うまれの者ぢや、これ故郷にこれから帰って阿弥陀様の教えを罪亡ぼしに弘めようとの念願を立てた。あんたも房州

と聞いたが、して何処へゆかれる」

「師匠のおられる、房州清澄山へ帰るものでございます」

「四か年の鎌倉滞在、念仏の教も充分に会得せられたろう、どうじゃなあ」

「会得と言う程のことありませんが、ほぼ極めましたつもりでおります」

「共々有難いことぢや」

「しかし……」

蓮長法師はここで言葉をきると、きつぱり言い放った。

「ご坊のお考えとは、とんと異なります」

「えっ」

つれの僧侶はちよつと立ち止まったが、歩き出して

「どう違ふんじや」

「さよう、念仏の教えも一応の理がおりますが不審にたえぬは、あれ程極樂往生を説きながら臨終にあたつての狂乱の相、遠くは開祖とも言うべき善導和尚の柳樹の縊死、善慧、隆観、聖光、薩生、南無、真光寺、一宗の長者達の臨終の悪瘡重病はいかなるものかと深く思いました」

「ううむ」

怒つたような顔色をみせたが、年長の貫祿をみせて連れの僧侶は、

「それから、」

と穏やかに先きをうながした。

「よつて往生とは、一体いかがなことかと疑問をもつようになり、鎌倉遊学四か年殆んど寺々の法話を聴聞するよりは、鶴ヶ岡の八幡宮寺の経蔵に通つて、一切経を讀んでおりました。しかるに法華経を讀んで始めて往生の真意を会得しました」

「なんと会得せられた」

「浄土に往生して成仏をする説は権経の配立觀経の権説也と会得しました」

「わしにはちよつとむずかしいわ、もつと易しく言えんかい、若い時は、えてしてむずかしい言葉を使つて、相手を煙にまきたがるもの、風態は僧形でも、南無阿弥陀仏の名称しか知らんわしぢや」

「御謙遜で恐れ入りさすが、この土に生れた以上は、自分の身を仏になるべき因とみて、この土に往生すべきである、と、経文より教わりました。法華経には今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子とありますから、この国土に生ずるものを口にしてこの身を養う我が身は、これこの国土とひとつもの、その国土はわがものであると仏は言われておりますから私達は等しく仏の子、今更どこに浄土を求めましょうや」

「若い若い、御坊はいくつぢや、二十一歳か……さもあらん、苦勞が足りんわ。二十一歳といえ

ば、御坊が九つの時と思う、寛喜二年の大飢饉より未曾有の米の値上り、翌る年には、全く食糧欠乏して、わしどもは草を粉にして食べておったぞ」

連れの僧は、ふいに道端のよもぎのくきを折ると、その葉をかみながら言葉をつづけた。

「この草などは人が争って採る食べ物ぢやったよ、親が子のものを奪い、子が親のものを盗み食う、それが三年もつづきおった。この地獄の世がどうして浄土であろうか、かてて加えて御坊の十二の時の天福元年にはあの天変地天、ここ二、三年は少しは落着いたが、何時また修羅地獄の世の中に変わるかも知れん。どうしてどうしてこんな世の中が浄土であろうか」

「では……本来浄土であるべきこの土が何故修羅地獄の相を呈したか、その原因を考えられたことがありますか……本来仏の所有であるべきこの土に生を受けながらその仏の正意を踏みにして、我意を通そうとすればこそ飢饉もあろう、天変地天、疫病もありましょう。あれをこらんなさい」

夏草茂る彼方に屹立する雄大な富士を指した蓮長法師は、

「この土が浄土のしるしはあれ、あそこにあります」

言いきったその横顔には確信のほどが、はつきりとみえていた。

